

四天王寺所蔵千手観音及び二天像箱仏についての一考察

一本 崇之（神戸大学大学院）

大阪・四天王寺が所蔵する千手観音及び二天像箱仏（以下、四天王寺像と略）は、平安時代後期に制作された檀龕仏の優品として早くから知られてきた。幅10.3センチ、高12.3センチの小さな箱形に蓮華座に坐した千手観音と、扉に持国天と増長天の二天像が彫り出され、平安時代後期の精微な彫刻技術を見ることができる。久寿元年（1154）に制作された峰定寺千手観音坐像との様式の近似から12世紀中頃の制作とみられ、作者としては円派仏師が想定されている。このように四天王像は、平安時代後期の彫刻様式を顕著にあらわしている重要作例であるが、先行研究の多くは作品解説がほとんどであり、これまでに十分な検討がなされてきたとは言えない。そこで本発表では、四天王寺像の像容や作風を再確認した上で、特に千手観音の台座や二天像に注目して、その造形上の特徴を考察する。

千手観音の坐す蓮華座は、仰蓮・上反花・華脚のみで構成される非常に簡素なもので、敷茄子や框を設けない点が特徴である。台座の変遷を時代的にみると、古い時代には比較的簡単なものが多く、時代が降るにしたがって段の数がが増えて複雑になる傾向にあり、四天王寺像のような簡素な台座は平安時代後期の他作例にはほとんどみられない。一方で、このような台座は、法隆寺金堂壁画等にみられる台座形式に通じる感覚をみせることが指摘できる。法隆寺金堂壁画中の半跏菩薩像（第2号及び第5号壁）の台座は、仰蓮・上反花・框・華脚・框・下反花で構成され、敷茄子を表さずに華脚で仰蓮を支える構造をしており、直接ではないにしろ、四天王寺像の制作の背景には法隆寺金堂壁画のような古い図像の存在が想定される。また、胸飾から垂れる瓔珞が、腹前で花飾りを中心にX字状に交差して膝部に広がるが、このような瓔珞の形式も奈良時代の檀像彫刻等にみられる古様な表現であり、古像からの影響がうかがえる。ところで、本像と同じ千手観音を表す檀像の作例として、京都国立博物館所蔵の千手観音曼荼羅合子形龕が挙げられるが、瓔珞の形状や膝部に連珠の飾りをつける点、裳懸を表す点など四天王寺像と多くの共通点が見いだされる。特に台座においては、仰蓮・上反花・華脚・受座・下反花を表し、下の受座・下反花が加わっているものの基本的な構造は四天王寺像と近似しており、四天王寺像と同様の規範となる図像の存在が示唆される。

また、二天像に注目してみると、兜に獅噛みをあらわす点は興福寺東金堂多聞天と共通し、二天像がともに兜を被り左右対称に表される点は、巖島神社所蔵の諸尊仏龕が納められる外箱にある二天像のような中国からの請来像を参考にしたことが想像される。さらに、本二天像のプロポーションについては、頭を比較的大きく造り、胴が短く腰部では量感をしっかり持たせた体軀が特徴で、広隆寺十二神将像等に代表される院政期の神将像のように、頭を小さく造り、量感を強調しない軽快なプロポーションとは一線を画している。このような特徴は、むしろ9世紀初期の制作とみられる興福寺東金堂四天王像の増長天に近い感覚であり、造形の上でもこのような平安初期の古像を参考にしたことがうかがえる。

以上の考察により、四天王寺像は、平安時代後期の様式を顕著に表している一方で、台座の形状や二天像の特徴から、奈良～平安時代初期の古像や図像を参考に制作されたことが推定され、手本となる原像の存在が指摘できる。四天王寺像は、平安時代後期の和様檀像の中で、その制作過程において復古的な造形意識のもと制作されたことを示す作例として位置づけられるのである。